



告白
こくはく
PRODUCE!
プロデュース!

だいこくや けっせい
「代告屋」 結成しました!?

とおや
十夜 / 原作

なお
ココロ直 / 著

モゲラッタ / イラスト



プロローグ

004

第1話 代告屋の結成と、決意の行き先

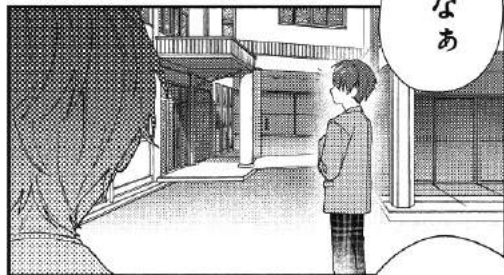
- 1 一人目の仲間 012
- 2 二人目の仲間 044
- 3 木陰のベンチ 086
- 4 答えの、その先 107

第2話 代告屋の始動と、真っ白な手紙

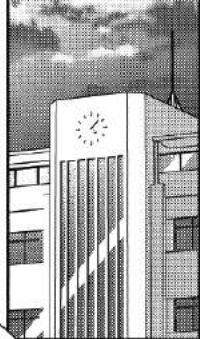
- 1 初めての依頼 130
- 2 最善の一手 145
- 3 見えないメッセージ 165
- 4 逆転の一手 192

エピローグ

208



なあ



あんたが
いらいしゃ
依頼者の

こぼやくん
小林君か？



じゃあ
君が……

そのとーり！



メンバーは
そう！

隠れた趣味から
昨日の晩ゴハンまで
なんでも調べる
リサーチの鬼



ひね 善宗
よし 薫
(ゼン)

情報担当の
ゼン！

成績優秀

スポーツ万能

おまけにムカつく
くらいイケメン！



戦闘担当の
リョウ！

さがみ りょう
相模 稜
(リョウ)

根暗なのに
おせっかい

一番地味でも
我らがリーダー！！



頭脳担当の
ユウ！

あいかわ ゆう
哀川 裕
(ユウ)

あなたの告白
お助けします

代理告白
株式会社!!

代告屋です!





心配しないで
活動内容は
本だから

おれたち
三人でキミの
告白を手伝うよ

もちろん報酬は
いらぬ



ゆー
二ゆー

そこは
場合によりけり!



でも……
手伝うって
何を……?



代理で告白
したり

君自身が告白
するためのプランを
考えたり……

まあ
つまり君のために
なんでもやる
ってコト!

すごい……

マンガの続きは本編で!

ここからは2章の「事件」をチラ見せ!



しかし、事件は翌週の水曜日、放課後に起こった。

「部室に行くか。ま、今日も誰もいないだろうけど」

そうつぶやいて自分の席でバッグを開けるユウの目の前に、まったく音も気配も感じさせずに一人の男子生徒が立っていたのだ。

「うわっ、びっくりした! ……って、小林くんか。どうしたんだ?」

そこにいたのは、生気のない顔でうつむいている小林くんだった。わざわざE組の教室からここまで来たということは、例の件で何か進展があったという報告なのだろう。

あれから清書したラプレターを確認し、足立さんの靴箱に入れたのが先週末のことだ。小林くんが選んだ便箋は思っていたよりセンスが良くてますます安心できた。

か……今の彼の表情はあまりにも暗い。ユウの脳裏にイヤな予感が走る。

「あ、哀川くん……その……あの……ご、ごめん、なさい」

小林くんは今にも泣き出しそうだ。

ここでは目立ってしまふと考え、ユウはすぐに彼をつれて移動した。すぐ隣、A組の教室から顔を覗かしたゼンに目で合図すると、ゼンは何も言わずに一緒に来てくれた。

三人で向かったのは、やはり旧校舎。文芸部の部室だ。

何度もしゃくりあげる小林くんをなだめながら、ユウとゼンはどういう状況なのかを聞き出した。

ユウにしても、自信はあったとはいえ、『ラブレター代筆作戦』がうまくいかなかった時のことも想像していた。すでに彼氏がいる、と完全なお断りの返事が来てしまつてはどうしようもないが、それ以外の返事なら、また別のアプローチを提案しようと思つていた。

ところが、相手からの返事は、ユウもまったく予想していなかつたものだった。

「け、今朝、これが……僕の靴箱に……」

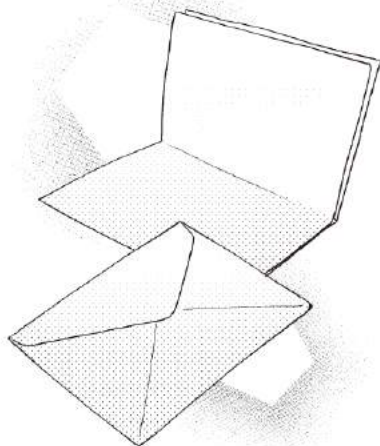
小林くんが差し出してきたのは、彼が選んだものとは違う、白い封筒だった。すでに封は切られてる。

ユウが受け取つて、中身を確認した。

そこには、便箋が二枚だけ、入つていた。他には何もなかつた。

「え……。な、なんだよこれ。どういうことだよ……」

便箋を広げて、ユウの表情は固まってしまった。
そこには、何も書かれていなかった。何も、だ。返事どころか、宛名も、差出人の名前も書か
れていない。完全な白紙だったのである。



3 見えないメッセージ

翌日、放課後の文芸部部屋には、代告屋の三人がそろっていた。

ユウは、バックジューズに挿したストローを吸いながら、神妙な表情で肩を落としている。

リョウの集中稽古は昨日で終わり、今日の活動は休み。ゼンは、パソコン部を今日もサボっている。こうして三人そろったのは、ひさしぶりだ。

他には誰もいない。小林くんもいなかった。

「なるほどなあ。それで来た返事が、白紙、か……」

詳しい流れをユウとゼンから聞いたリョウが、難しい顔でつぶやいた。

長机を挟んで座る三人の目の前には、その白紙の便箋が広げられ、宛名のない封筒と一緒に置かれていた。

これは「お断りします」という意味だと解釈した小林くんはひどくショックを受け、あのあと手紙を放り出したまま去っていったのだ。今はユウがそのまま預かっている。

ゼンも珍しく難しい顔だ。

「昼休みがちらつとE組とC組の教室見てきたけど、サクラちゃんは昼練でいなかったからどんな様子かわかんない。こぼつちのほうは……欠席だつてさ」

無理もない、とユウは同情した。これをお断りの返事だと解釈するのなら、普通に断られるより傷つくだらう。何かの手違いなのかもしれない、とあの時もフォローしたのだが、小林さんの耳には入っていない様子だった。

それにしてもわからない。あらためてユウは首をひねった。これは小林くんの言うように、本当にお断りの返事なのだろうか。仮にそうだとしたら、あの足立さんがこんなことをするだろうか。ほんの少し会話しただけだったが、とてもそんなふうには思えない。

ゼンも同じことを思っているようで、置かれた封筒を逆さにしたり覗きこんだり、息を吹きこんだりしている。

「ねえ、ユウ。これホントに他には何も入ってなかったの？ 実は小さいけどすごく大事な何かが入ってたとかさ〜」

「入ってなかった。俺も何度も見たし、ゼンだつて一緒に確認しただろ。なんならあのあと靴箱の周辺に何か落ちてないか探してもみたけど、何も見つからなかった。入っていたのは間違いなく白紙の便箋二枚だけだ」

「んじやあ、サクラちゃんが入れ間違えたとか？」

「そういうことなら足立さんに聞かないとわからないけど、でもわざわざのり付けまでしてるんだから、最後に確認くらいするだろ」

「だよね……。あ、でもさ——」

しばらく、ああでもないこうでもない、議論になった。といつても、ゼンが思いついたことをユウが論理的に否定する、という流れだった。

その結果、やはり足立さんはあえて白紙の手紙を小林くんの下駄箱に入れた、という結論に達した。

「じゃあこれ、サクラちゃんからのクイズとかじゃないの？ ヒントがどこかに隠されてる、みたいな」

たしかに、便箋や封筒自体に見えない仕掛けがほどこされている可能性もある。ゼンはただの思い付きで言ったのだが、だまふたり二人のやり取りを聞いていたリョウがその言葉で何か思いついたらしい。何度も便箋の裏表を確認しながらこう言った。

「ちよつといいかな、ユウ。もしかしてこれ、『あぶり出し』じゃないのか？」

「あぶり出し？」

と、反応したのはゼンのほうだった。

「小学生の時に理科の先生がやってくれたら、紙にミカンの汁で字を書いたら、その時には何も見えないが、火であぶると汁の部分が焦げて字が浮かび上がってくるっていうやつ」

「へ〜」

リヨウの説明にもゼンはいまいちピンときていないような反応だったが、ユウはしつかりと首を横に振って答えた。

「それは俺も疑ったんだ。あぶり出しならアイロンの熱でも文字が浮かび上がるから、昨日家で母さんに借りてやってみただけど……だめだった。光に透かしてみたりもしたけど、紙そのものに細工なんてないんじゃないかと俺は思う」

「そうなんだ？ まあ、ユウなら、おれたちの考えつきそうなことはすでに試してるよなあ」
実際、考えられる可能性は一通り検証していた。が、どれも不発に終わった。

真正正銘、この白紙の便箋だけが足立さんの「答え」なのだ。

「んじやあ、やつぱり、その……お断りっていう意味なのかなあ……。なんか、こぼつちカワイソ……」

口をとがらせるゼンに、ユウは少し考えてから言った。

「わざわざ便箋を用意して畳んでのりで封をして、人目を忍んで小林くんの靴箱に入れた……足立さんならそんなまどろっこしいことしないで、きつぱりと断つてくると思うんだけどな」
一緒に足立さんと接触したゼンなら、わかるだろ？ とユウが視線を向けると、ゼンはどこか緊張したような面持ちで押し黙っている。

「どうした、ゼン」

さすがに気になったユウが問いかけると、ゼンは重たげに口を開いた。

「実は……ラブレター代筆作戦でデートにこぎつけた時のためにサクラちゃんのことを調査してただけど、ちよつと噂を耳にして……」

「噂？」

「サクラちゃん、ずっと昔から、好きな人がいるかも……。幼なじみで、片思いなんだって……」

ユウは思わず立ち上がって叫んだ。

「おい！　なんでそれをもつと早く言わなかったんだよー！」

ほとんどなくなっていたジュースのパックが、勢いでばたと倒れる。

「だ、だって、この噂、サクラちゃんの友達の一人在何年前に一度聞いたきりだっていうから、たしかな情報とは言えなかったし！　別の子と話してるのがたまたまちよつとだけ耳に入っ

ただだから、聞き間違いかもしれないって……！」

「それでも、その可能性があるってわかっていたら、もっと慎重な策を練ったし、事前にあきらめるって選択肢もあつただろ！……小林くんだって、無駄に傷つくことはなかった！振られるってのは周りが思ってるよりずっと本人にとってはキツイんだぞ！」

ユウの言葉には実感がこもっていた。それがわかつてゼンもひるんだが、しかし思い直したようにまた叫ぶ。

「その噂を聞いたのは、もうラブレターの清書をしたあとだったんだよ！あのタイミングで空気が悪くしなくなかったし、ユウのラブレターなら、好きな相手がいちとして成功するかもつて！オレらが初めて正式に受けた依頼だったから……成功させてリョウをびくりさせたかつたし、ユウにも喜んでほしかったんだよ！」

「……っ！」

ユウは言葉を詰まらせた。初めての正式な依頼を成功させたいと思つていたのはユウも同じ。

むしろゼンがそんなふうにも思つてくれていたことに驚いたし、今さら気がついた。自分たちは三人で代告屋なのだということに。

「よし、そこまでしよう！」

白紙の便箋を置いて、リヨウが冷静に言った。二人へと交互に視線を向ける。

「おれたちがもめても仕方がない。あくまでも当事者は小林さんと足立さんだから。それに……おれたちは依頼者の小林くんにはかり肩入れして、足立さんの事情には気が回っていないかった。全員の反省点なんじゃないかな」

ユウはズキツと心が痛んだ。力なく腰を下ろし、うなだれる。

リヨウの言う通りだ。自分も必ず成功させたいという思いが先に立つてしまい、相手のことをろくに知らないまま焦った作戦を実行した。ゼンのことを責める資格はない。そんな思いが、ユウの頭の中をぐるぐる回ると駆け巡る。

「すまん。ゼン……」

「あ、いや……オレこそゴメン」

小さく謝り合う二人に、リヨウが優しい声で、問いかけた。

「なあ、ユウ、ゼン。告白して、するほうと、されるほう、どっちが大変だと思う？」

思いがけない質問だった。

もちろんユウの中ではすぐに答えが出る。つい最近体験したのだから。

「そりゃあ、するほうが大変だろ。誰にでも告白するタイプならそうでもないだろうけど、普通

なら告白するのつて相当な勇氣がいるからな」

それにはゼンも同意のようだ。

「そうだよ。告白されるほうは、モテてるんだからうれしいでしょ。好きな相手からじゃなくても、好かれてるつて思つたら気分いいだろうしさ」

二人の意見に対して、少しだけ間をおいてから、リヨウは言った。

「だけど、告白されたほうは、返事をしなきゃいけないだろう？ こっちも好きな相手だったらいい。でも、そうじゃない相手だったら？ 断つたら確実に相手を傷つけることをわかつて、それをしなければいけない。極端な言い方をすれば、強制的に悪役を演じさせられるつてことになるんじゃないか？」

ユウはハツとした。まったく考えていないことだったのだ。

「案外この手紙は、きつぱり断ると相手を傷つけると悩んだ足立さんが考え出した、精いっぱい意思表示かもしれない。そうとは考えられないかな？」

「で、でもさ、そんな性格の子には見えなかつたつていうか、その……」

ゼンは反論しようとしたが、歯切れが悪い。ユウと同じで、リヨウの言葉にハツとするところがあつたのだろう。



「……どうしよう、ユウ」

助けを求めようかなゼンの言葉に、ユウはしばらく考えた。
いろいろな思いが、心の中に渦巻く。



リヨウの言う通りかもしれない。

断りたい、でも小林君を傷つけたくない。

そう悩んでいたのかも。

これならきつとうまくいく、と独りよがりと考えて『ラブレター代筆作戦』に手を出した過去の自分のことが腹立たしくて仕方なかった。

かといって、何が正解だったのかもわからないし、こうなってしまった現実を変えられない。

それに、もしこの手紙が、お断りという意味ではなかったら？

ここで結論を出してしまつて、本当にいいのか？

「くそっ！」

自分を奮い立たせるように、ユウは再び立ち上がり、封筒と便箋をつかみ取つた。

「俺、足立さん本人に聞いてくる！」

「あ、ちよつと、ユウ！」

ゼンが止める声も振り払つて、ユウは駆け出した。

本校舎の付近には、下校中の生徒が何人か見えた。

その中に足立さんがいないことをすばやく確認しながら、ユウは走る。

「まだだ……まだ……」

仮に、この白紙の意味が「お断り」だったとしても、その理由は？

小林くん本人には言いづらいとしても、友達だと言ってある自分になら話してくれるかもしれない。

それに、まだこの手紙には別の意味があるという可能性だつて残っている。

ユウは、とにかく何かせずにはいられなかった。

「ハア……ハア……」

旧校舎から体育館まではけっこうな距離があるが、ユウは一気に走り抜けた。

部室での話し合いが思ったより白熱していたようで、すでに他の部活は終わりの時間を迎えていた。

女子バレー部もすでに活動は終わっており、コートには一年生だけが残つて後片付けをしているところだった。

ちょうど出入り口のところに一人でいた足立さんのもとへ、ユウが駆けこんでくる。短い三段

だけの段差の下から、ユウは叫んだ。

「足立さん！」

顔でも洗ったあとなのだろうか。足立さんは、顔を覆っていたタオルから目元だけ覗かせて振り返った。

ユウを見るその目には、怒りのような、悲しみのような、なんとも言えない複雑な感情が見えた気がした。

「なるほど、あんたか。哀川くんだっけ？ どうしたの？」

タオルを取り払った足立さんの表情は、普通だった。さっきの目は何かの見間違いかと思つたユウだが、しかし声色はあまり機嫌のいいものではなかつた。

「このこと、聞かせてほしいんだ！」

何それ？ という返事を必死に期待しながら、ユウは例の封筒と便箋を突き出した。

「確認したいんだ。これを小林くんの下駄箱に入れたのは——」

「アタシだよ。アタシが洋介の靴箱に入れた。それが、何？」

「何って……なんで白紙なんだ？」

「それがアタシの気持ちだから」



「白紙の手紙が……足立さんの、気持ち？」

ユウの言葉を遮るような、もつと言えば押しつぶすような口調だった。その表情も声と同じく不機嫌なものに変わっている。

「そうだよ。それがアタシの気持ちなんだってば」

「なんにもない……つてことなのか？ 小林

くんは本当にきみのことが好きなんだぞ？」

返事はなかった。足立さんは、フン、と小さく鼻を鳴らして、冷たく言い放った。

「あんた、本当は洋介の友達なんかじゃないでしょ？」

「え……」

なぜそんなことを指摘されたのか意味がわからず、ユウは混乱した。

足立さんは最後まで不機嫌な表情のまま、体育館の中へと引っこんだ。それを追うことは、もう、ユウにはできなかつた。



空を、厚い灰色の雲が流れていく。

少し肌寒いし、放課後の時間とはいえ、いつもより薄暗く、どんよりとした空気が崩れるのかもしれない。

そう思っていると、ぽつぽつと、細かい雨が降り出した。

しかし、ユウは濡れることがなかつた。旧校舎前の木陰のベンチに腰かけているからだ。生い茂った葉が傘になり、ちょうど雨宿りの格好になっている。

仮に濡れていたとしても、ユウはカバンの中の折り畳み傘をささなかつただろう。今はそんな気力もわかないというのが正直なところなのだ。

ぼんやりと雨の音を聞いていると、そこに「えっ？」という驚きの声がかかった。

「哀川くん？」